

SJ

The Safety Japan
since 1971

Close Up

クローズアップ 安全技術

安全運転支援システムの効果と限界を
正しく理解してもらうための研修

政府が安全運転サポート車（セーフティ・サポートカー、略称：サポカー）の普及を図る中、衝突軽減ブレーキ（自動ブレーキ）搭載車の販売比率は 2014 年以降、急速に増えている。Honda も昨年 9 月に発売した N-BOX 以降、軽自動車を含めた新型モデルで「Honda SENSING」（左下参照）と総称する先進安全運転支援システムを標準装備化している。そして、ドライバーが先進安全運転支援システムに対して誤解や過信をしないように、機能の効果や限界を正しく理解してもらうための啓発にも力を入れている。

警視庁交通部交通総務課
交通安全教育係 保谷健一さん警察署の安全教育担当者が
体験を通じて理解を深める

3 月 5 日と 7 日、東京都内 97 警察署の安全教育担当者を対象にした交通安全教育レベルアップ研修が開催された。この研修は各警察署で管内の学校、企業等の安全教育を担当している係員に対して、常に新しい情報や教育手法を提供し、効果のある安全教育を実施させるためのものである。警視庁交通部交通総務課交通安全教育係 保谷健一さんは、「安全教育の対象者は子どもから高齢者、また歩行者、自転車利用者、職業ドライバーと多岐にわたるため、各警察署が必要としているもの、また推進すべきものを交通部で選別し、教育効果が上がるよう、専門家による実践的な技能指導等を通じて指導力強化をめざしています」と研修の意義を話す。

そして、保谷さんは今回の研修に安全運転支援システムの体験を通じて理解を深めてもらう内容を組み込もうと、Honda 安全運転普及本部に協力を要請した。「このような内容を取り入れた背景は 2 点あります。1 点目は、高齢者の事故防止対策です。加齢に伴う身体機能の低下を先進技術でカバーし、交通事故の被害者と加害者を減らすため、まずは私たち指導者が安全運転支援システムの優れた点を理解し、機能について普及啓発を行うことです。2 点目は、『自動ブレーキ』と聞いただけでは『魔法のブレーキ』のような印象を受ける中、それを過信して事故を起こしてしまわないかを懸念したものです。私たちがシステムを正しく理解し、ドライバーがとるべき行動を様々な場で伝えたいと考えています」。

研修会場となった警視庁交通安全教育センター（東京都世田谷区）には「Honda SENSING」を搭載したクルマが用意された。運転は Honda のスタッフや交通教育センターインボーク埼玉のインストラクターが担当し、参加者は助手席や後部座席に同乗して、衝突軽減ブレーキ（CMBS）、誤発進抑制機能、先行車発進お知らせ機能、標識認識機能の 4 つを体験した。

Honda SENSING

安心・快適機能を搭載した先進的安全運転支援システム

① 衝突軽減ブレーキ（CMBS：Collision Mitigation Brake System）

前方、クルマや歩いている人とぶつかりそうになった時、ディスプレイ表示や音で警告。緊急時には自動で強いブレーキをかけて、ぶつからないようにサポートする。

② 誤発進抑制機能

前の方に障害物があるにもかかわらず、うっかりアクセルを強く踏み込んでしまった時、急加速を抑える。

③ 後方誤発進抑制機能

後ろの方に障害物があるにもかかわらず、うっかりアクセルを強く踏み込んでしまった時、急加速を抑える。

④ 歩行者事故低減ステアリング

車線を外れて、歩いている人と衝突しそうなお時、ディスプレイ表示と音で警告。ステアリングも制御して回避するようにサポートする。

⑤ 路外逸脱抑制機能

車線を外れてしまいそうなお時、警告だけでなく、クルマを車線内へ戻すようにステアリング操作をサポートする。

⑥ ACC（アダプティブ・クルーズ・コントロール：Adaptive Cruise Control）

高速道路などでアクセルを踏まなくても、前を走るクルマと適切な距離を保ってついていくようサポートする。

⑦ LKAS（車線維持支援システム：Lane Keep Assist System）

高速道路などで、クルマが車線の中央付近に沿って走れるようにステアリング操作をアシスト。ロングドライブでのドライバーの負担を減らす。

⑧ オートハイビーム

対向車や前を走るクルマを検知して、ハイビームとロービームを自動で切り替える。

⑨ 先行車発進お知らせ機能

信号待ちなどの停車時に、前のクルマが発進したことをディスプレイ表示と音で知らせる。

⑩ 標識認識機能

道路標識を認識してディスプレイに表示。標識の見落とし防止を図り、安全運転をサポートする。

⑪ トラフィックジャムアシスト（渋滞運転支援機能）

高速道路での低速走行の時、前走車の車速変化に合わせて車間距離を保ち、車速・車線の中央付近を維持するよう、ステアリング操作を支援することでドライバーの運転負担を軽減する。

※車種により搭載機能が異なる。

各機能の詳細は以下のホームページを参照。

<http://www.honda.co.jp/hondasensing/>

Contents

- P1 Close Up 安全技術
- P2 Safety Info. インフォメーション①
- P3 Safety Report セーフティポ 高齢者
Safety Info. インフォメーション②
- P4 Safety Report セーフティポ 子ども
Close Up クローズアップ 福祉安全運転
- P5 Close Up クローズアップ 四輪販売会社
- P6 SJ Interview 岐阜県垂井町立垂井小学校校長 後藤喜朗さん
- P7 TRAFFIC SCOPE 交通参加者の行動を観察
- P8 危険予測トレーニング (KYT)
SJ クイズ



Safety for Everyone

Honda はすべての人の
交通安全を願い活動しています。

SJ ホームページは

編集室：本田技研工業株式会社 安全運転普及本部内
〒107-8556 東京都港区南青山 2-1-1
TEL：03(5412)1736
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/>
編集人：中嶋英彦

※ご不明な点がございましたら、下記までお問合わせください。
(株)アストクリエイティブ安全運転普及本部係
TEL：03(5439)1191
E-mail：sj-mail@spirit.honda.co.jp

技術への誤解や過信を
取り除くことが大切

体験が終わると、「Honda SENSING」に関する座学となる。講師を務めるのは本田技研工業（株）日本本部商品ブランド部商品企画課主幹 吉田秀彦さん。吉田さんは四輪販売会社（Honda Cars）のスタッフに「Honda SENSING」を正しく理解してもらうための啓発活動を担当している。

まず、「Honda SENSING」は実際の交通事故データを徹

底的に分析し、独自の基準で事故の回避支援と被害軽減の実現をめざすものと説明。そして、技術の進化も重要だが、機能に対する誤解や過信を取り除いていくことも大切であると強調した。「例えば、私たちは自動ブレーキではなく、『衝突軽減ブレーキ』と表現しています。衝突時の被害を軽くするためのもので、衝突前にクルマを完全に止められると断言できるものではないからです」と吉田さんはいう。そして、常にミリ波レーダーと単眼カメラで前方の状況を確認し、ドライバーをサポートする「Honda SENSING」の仕組みと作動原理を解説。「レーダーもカメラも本来の性能以上のことはできません。天候状況などでカメラが対象物を見つけれないこともありますし、レーダーが反応しない道路状況や対象物も存在します。そこで、私たちはお客様に『条件がそろえば、自動で作動しますが、自動で作動することと衝突しないことは同じではありません』と説明しています。機能には限界があるということを理解していただきたいと思います」。この後、「Honda SENSING」に関する質疑応答があり、その1つ1つに吉田さんが回答を行った。最後に受講者はグループに分かれて、「先進技術の有効性と安全教育について」というテーマでディスカッションし、研修は終了した。

研修には合計100人以上が参加。警視庁の保谷さんは「受講した全員が『Honda SENSING』を体験できたので、たいへん有意義な研修になりました。安全運転支援システムの機能の限界についても、わかりやすく解説していただき、ありがたく思っています」と感想を語った。Hondaはお客様に正しく理解していただくために、また体験試乗会を安全に運営するために、四輪販売会社(Honda Cars)のスタッフに対し、交通教育センターにて「Honda SENSING」の研修を実施している。今後、全国のHonda Carsを通じて、先進の安全運転支援システムに対する正しい理解の普及を強化していく考えだ。



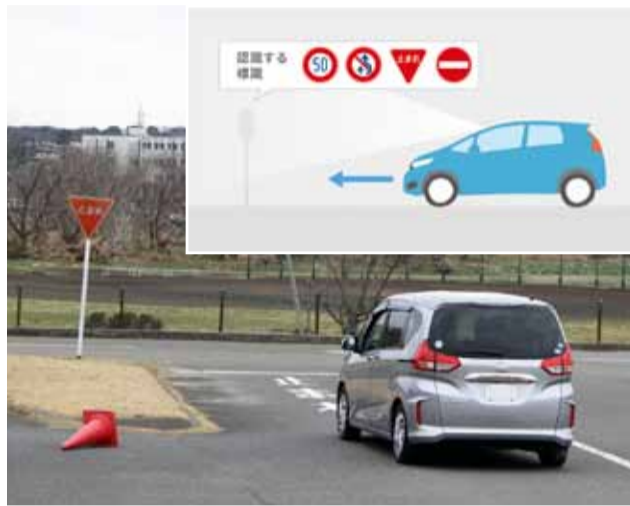
「Honda SENSING」の体験はHondaのスタッフやインストラクターの運転のもとで行われた



専用のダミーターゲットを使った「衝突軽減ブレーキ (CMBS)」と「誤発進抑制機能」の体験



前車が発進したことをディスプレイ表示と音で知らせる「先行車発進お知らせ機能」の体験



道路標識をディスプレイに表示する「標識認識機能」の体験



坂道など道路状況によりレーダーやカメラが前車を正しく検知できないケースも体験してもらう



体験後の座学では、本田技研工業(株)吉田秀彦さんが「Honda SENSING」の仕組みと作動原理を解説

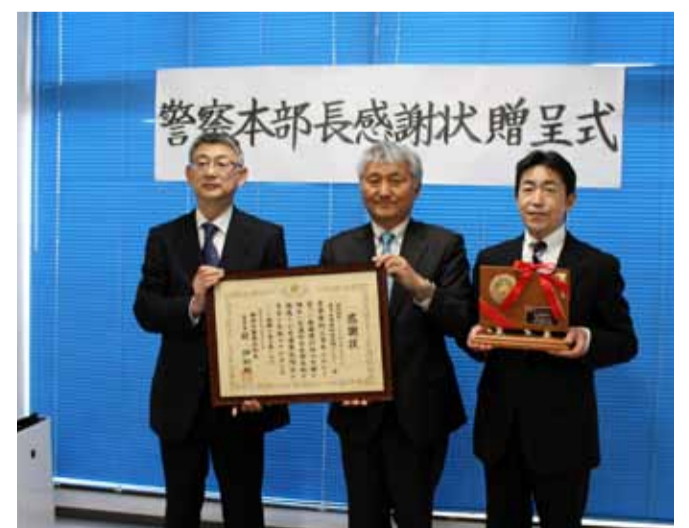
Safety Info.

インフォメーション①

交通教育センターレインボー浜名湖に 静岡県警察本部が感謝状を贈呈

交通教育センターレインボー浜名湖は2002年の開所以来、静岡県警察白バイ隊の訓練にコースを利用してもらい、同センターのインストラクターが新規隊員の養成訓練、現役隊員へのフォロー研修に協力している。こうした白バイ隊員の公務中の交通事故防止をはじめ幅広い交通安全活動に対して静岡県警察本部は高く評価し、2月

13日、同センターに感謝状を贈呈した。小林朋幸・同センター所長は「私たちが実践している『人から人への手渡し交通安全活動』を評価していただき、職員一同うれしく思っています。今後も警察行政に積極的に協力し、地域の交通教育センターとしての役割を果たしてまいります」と語った。



写真左から、武村和典・静岡県警察本部交通部長、佐竹正規・(株)レインボーモーターズ代表取締役社長、小林朋幸・交通教育センターレインボー浜名湖所長

Safety Report

セーフティポ 高齢者

自分が運転している映像を観察し、改善点を高齢ドライバー自ら考える

ツインリンクもてぎの交通安全センター、アクティブセーフティトレーニングパーク (ASTP) では、栃木県の委託により県内在住の高齢ドライバーを対象とした「しあわせ高齢ドライバースクール (以下、スクール)」を開催している。クルマを必要とする高齢ドライバーに、安全・快適に運転を続けてもらうことがスクールの目的だ。使用する安全運転教育プログラムは、Honda が独自に開発したもので、「自分の運転行動を客観的に振り返る (自己観察法※)」 「受講者自ら答えを見つけ出す」ことが特徴である。平成 21 年度から始まり、平成 28 年度までに 1000 人以上が受講している。

※自己観察法＝東北工業大学の太田博雄名誉教授らが (公財) 国際交通安全学会などで研究成果を報告している手法。自分の運転をビデオで録画して観察し、「我が身振り返り見て、我が振り返り直す」手法。

「しあわせ高齢ドライバースクール」のカリキュラム

- ① 運転自己評価表で自分の運転を振り返る
- ② 実車でコースを運転
- ③ 記録した映像・データをもとにグループディスカッション
自らの気づきを促す
- ④ KYT
生活場面の危険、交通状況に潜む危険を予測する
- ⑤ 確認走行

2月28日、栃木県壬生町の高齢ドライバー6人が受講した。まず、一人ひとりに運転自己評価表を配付し、現状把握のために、机上で今までの自分の運転について振り返ってもらう。その後、受講者はインストラクターが同乗する実車で指定されたコースを運転。車内外に設置したカメラやセンサーで、運転の様子と速度や加減速、車体の挙動などの変化を撮影・記録する。全員の走行が終わると、受講者は3人ずつグループに分かれ、インストラクターと記録された映像やデータをもとに話し合う。「止まれ」の標識のある交差点を通過する場面では、どのように停止線の手前で一時停止しているかをチェックするため、画面の速度表示に注目してもらう。「0km/h になっていないね」と受講者は苦笑い。「皆さんは止まっているつもりでも、実際には止まっていませんでした。きちんと止まった上で、左右が安全であるかどうか確認することが



実車走行で記録した映像をもとに、インストラクターが各々の気づきを促す

大切です」とインストラクターが補足する。また、交差点を左折する場面では、自分が運転している映像に注目してもらい、巻き込みを防ぐために必要な左後方の確認のタイミングがどうか、目視確認が適切にされて、十分であるかどうかを客観視することで、受講者に気づかせる。今まで適切に対応できていて今後も継続する点と、不足していて改善すべき点を運転自己評価票を使って確認してもらうことにより、「気づき」の手助けをするのである。

午後は KYT (危険予測トレーニング)。寝室の様子が描かれた生活場面の KYT シート (写真参照) を受講者に渡し、危険と思われる箇所にシールを貼り付けてもらう。「危険だと思った箇所が多ければ多いほど、様々なところに気を配ることができ、危険感受性 (危険を危険と感じる力) が高いといえるでしょう。運転中の場面でも危険と感じる箇所をいかに増やせるかが、事故を防止する上で重要になってきます」と



生活場面の KYT シート



動画 KYT を使って、受講者に危険と感じた点を答えてもらう

インストラクターは KYT の意義を説明した。

次に、動画による KYT (Honda 動画 KYT)。実際の交通状況を再現した動画を見せて、受講者にどのような危険を感じたか答えてもらう。そして、そのような危険を回避するためには、どのような運転をすべきかを全員で話し合った。

最後に確認走行として、受講者は午前中と同じコースを気づきがあった内容に注意して運転。「運転は自分自身をコントロールする気持ちが大切になってきます。気持ちの部分が乱れてしまうと事故につながりやすくなるので、注意しましょう」と、インストラクターが締めくくり、スクールは終了した。今回のスクールを担当した福岡孝恭インストラクターは「高齢者の場合、左折時に左後方の目視確認をしない傾向が多く見られます。加齢によって、身体をうまく動かせないので省略してしまうのでしょうか。私たちが指摘するのではなく、ご自身の運転を観察し、振り返ってもらうことで、現状を正しく認識していただき、安全意識を高め、安全行動が行えるようになるためのサポートをしたいと考えています」と話す。受講した高齢ドライバーの感想 (下記参照) から、自分の運転する映像を目の当たりにすることによって、受講者も自分の問題点を納得して受け入れられるようだ。このような受講者の気づきを促す教育が、運転行動の改善に導いていくといえる。



受講者はインストラクターを助手席に乘坐、指定されたコースを運転する



コースには「止まれ」の標識のある交差点などが設定されている



実車走行で記録した映像。カメラで前方 (中央) と左後方 (左下)、ドライバーの姿 (右下) などを撮影

●受講者の方々の感想

- 高齢になって、どんなところが衰えているか、知りたいと思い参加しました。自分が運転している映像を振り返るなど口で言われるより、わかりやすい内容でした。
- 自分が運転している姿を客観的に見るのは生まれて初めてだったので、とても新鮮でした。自分の運転の良いところ、悪いところがわかりました。今後は、守るべきことは守る、確認すべきところは確認しようと思います。
- 初心者の時に学んだことを思い出すことができました。また、危険はどこにでも潜んでいることをあらためて感じました。今日、学んだことを老人会の仲間にも伝え、興味のある人には受講を勧めようと思います。

Safety Info.

インフォメーション②

Honda セーフティトレーニングセンター四国がリニューアル

(所在地：香川県坂出市江尻町 1 番地 138)

香川県坂出市にある Honda の安全運転研修施設 Honda セーフティトレーニングセンター四国がリニューアルオープンした。今回のリニューアルで全体敷地面積が約 1.4 倍に拡張され、様々な研修カリキュラムに対応できるレイアウトとなった。同センターを活用した四国地区の企業・団体等への安全運転教育のさらなる充実が期待される。



3月23日に開催された同センターの開所式



コースを拡張したことで、直線路が従来よりも長くなっている

Safety Report

セーフティルポ 子ども

小学校入学直前の幼児とその保護者が一緒に学ぶ交通安全教室

3月8日、新潟県新発田市立米子保育園で同市の交通安全指導員が4月から小学生となる年長クラスの園児10人とその保護者を対象に親子交通安全教室を実施した。

同園園長の五十嵐由紀子さんは「親子で交通ルールを再確認してもらうことを目的としていますので、仕事がある保護者の方にもできるだけ都合をつけて出席してもらいようをお願いします。保護者と一緒に『交通ルールを守る』という約束をすることにより、子どもの印象に残りやすいと考えています」という。

交通安全指導員は、横断歩道の正しい渡り方を説明。横断歩道の前に来たら、まず止

まる。そして、手を上げて、右、左、右を確認してクルマなどが来ていなければ渡る。「子どもの視野は大人より狭いので、左右を確認する時は顔だけを向けるのではなく、おへそまで左右に向けているか注意してあげてください」と交通安全指導員が親子にアドバイスした。教室に用意された模擬の横断歩道を使って、親子で正しい渡り方を練習してもらった。

この後、教室を出て、子どもたちが卒園後に通う新発田市立米子小学校まで移動（同小学校は保育園の隣にある）。校門の前にある実際の横断歩道を親子で渡るのである。子どもたちは保護者と手をつなぎ、教

室で練習したことを繰り返し行った。最後に園長の五十嵐さんは「小学校入学までに、必ず親子で自宅から小学校まで歩いて往復して、お母さんやお父さんのことばで通学路の危険箇所を教えてください。通学するのは天気の良い日だけではなく、雨の日にも一緒に歩きましょう。晴れている日にはわからない危険に気づくことができると思います。お子さんも、ランドセルを背負った状態で傘をさすという経験ができます」と保護者に要望した。

参加した保護者からは「仕事の関係で子どもと関われる時間が少ないので、今日は一緒に学べて良かった」「私自身も道路の渡り方を練習することができ、家庭での指導に活かしたい」「今度、自宅から小学校まで子どもと歩いてみます」という声が聞かれた。交通安全指導員の平野マリ子さんは「幼児の交通安全教育の要は保護者です。保育園を通じて、この時期の交通安全教室には、できるだけ保護者の方の参加を促してもらっています。子どもたちには交通事故の被害者にも加害者にもなってほしくありま

せん。そのために、幼児の段階から『命を大切にできる気持ち』を育てられる指導をめざしています」と話す。木川きよみさんは「私たちの指導を保護者の方にご覧いただくことで、少しでも安心感につながればいいと考えています。この機会に、保護者の方も正しい交通ルールを再確認し、子どもの前で常実践してほしい」と語る。



米子小学校の校門前の横断歩道は登下校の際に子どもたちが必ず利用する



新発田警察署の警察官も安全の確保に協力



新発田市立米子保育園園長の五十嵐由紀子さん（中央）、新発田市交通安全指導員の木川きよみさん（左）、平野マリ子さん（右）



新発田市交通安全指導員が参加した親子に正しい横断歩道の渡り方を伝えた



手をつなく時は、子どもの手首をつかむようにアドバイス



模擬の横断歩道を使って、親子で正しい渡り方を練習

Close Up

クローズアップ 福祉安全運転

運転補助装置メーカー3社とHondaによる合同安全啓発「わたくしたちからみなさまへ『手渡しの安全』」

Hondaは(有)フジオート、(株)ミクニライフ&オート、(株)オフィス清水の3社と合同で、クルマに運転補助装置※の取り付けを検討しているお客様に対する安全啓発活動「わたくしたちからみなさまへ『手渡しの安全』」を4月から開始した（～9月末）。お身体の不自由な方の運転に関する情報は入手しにくい状況といえる。そこで、Hondaと3社は、ご自身に合ったクルマや運転補助装置の選択方法、運転免許試験場（センター）での適性相談、任意保険の事前告知義務、クルマに乗って「ご自身を知る」機会といった情報をまとめた安全啓発チラシを作成。3社を通じて、各メーカーの販売代理店などから安全啓発チラシを配付し、お客様の安全意識の向上に役立ててもらった。お身体が不自由でも、運転補助装置を活用すればクルマの運転ができるようになる方もいる。しかし、そうした方の多くは正しい知識や情報を知らないために「クルマを運転す

る」という考えにいたらない現状があると、(株)ミクニライフ&オート代表取締役社長大西浩樹さんはいう。「多くの方に運転する楽しさを伝えたいと、私たちは考えています。運転できるようになることは身体障がい者の自立にもつながりますが、それを前向きにとらえていない方もいます。身体障がい者の運転について、健常者にも理解を深めてもらうことが必要です。今回の活動は、そのきっかけづくりになると大きな意義を感じています」。

(株)オフィス清水代表取締役 清水深さんは、高齢かつ障がいをお持ちのお客様が増えていると実感している。「若い時に健康でも、高齢になれば様々な病気などでお身体が不自由になる可能性があります。健常者も他人事ではなく、自分や家族の将来のこととして考えてほしいと思います。脳卒中で身体に軽い麻痺が残るようなケースでは、運転補助装置を使わずに無理して運転して

写真左から(有)フジオート代表取締役 杉山光一さん、(株)ミクニライフ&オート代表取締役社長 大西浩樹さん、(株)オフィス清水代表取締役 清水深さん



しまう方がいます。このような方に運転補助装置を活用してもらうにはどうすべきか、合同安全啓発の結果をふまえて検討していく予定です。

(有)フジオート代表取締役 杉山光一さんは「もしハンディのある方が運転するクルマの事故が多くなれば、クルマの運転は敬遠されてしまいます。逆に、安全に運転できることが理解されれば、移動手段として活用されていくでしょう。安全に関する活動を社会にアピールしていくことは重要です。今、高次脳機能障がいになった方の運転再開において、医師や作業療法士による認知・判断の領域での取り組みが進んでいます。運転は認知・判断・操作で成り立っていますから、私たちが操作の領域でサポートでき



運転補助装置の取り付けを検討しているお客様に配付する安全啓発チラシ

れば、社会として大きな流れを生み出せると考えています」と話す。

「Hondaと連携することで自動車業界、さらには国を動かしていける可能性があります」と、3社はお身体の不自由な方が運転するための環境改善へとつなげていく考えだ。

※運転補助装置＝お身体の不自由な方が自分でクルマを運転するために必要となる装置。両足が不自由な方が手でアクセル・ブレーキ等の操作ができる手動運転補助装置などがある。

Close Up

クローズアップ 四輪販売会社

地域に広がる Honda Cars による
幼児向け交通安全教育

子ども向けイベントとして交通安全講習を実施
Honda Cars 南栃木

Honda Cars 南栃木（本社：栃木県小山市）は、各拠点で子ども向けのイベントを実施する際に交通安全講習を実施している。2月25日は羽川店で「お子様イベント」が開催された。「あやとりい ひよこ編※（以下、あやとりい）」による交通安全講習と、子どもたちに自動車整備士の仕事の一部を体験してもらうキッズエンジニアを組み合わせた内容となっている。羽川店店長 菊池洋平さんは「お客様の家族を交通事故から守るため、昨年10月から『あやとりい』による



導入の音当てクイズでは街で耳にする音を再生し、それがワークシートのどこにあたるかを子どもに示してもらう

交通安全講習を始めました。3回目となる今回はキッズエンジニアを加え、より多くのお子さんに参加していただけるイベントをめざしました」と話す。

交通安全講習では同店の永藤佳織さんが「あやとりい」のワークシートを使って、道路を歩く場所や歩行者用信号機の色の意味について、子どもたちに問いかけながら説明。特に道路を横断する時は、必ず止まって右、左、右を観ることを繰り返し強調した。一方、キッズエンジニアではショールームに展示されているクルマを使って、同店の石川純さんが子どもたちとタイヤの空気圧や溝の深さ、エンジンオイルの色や量を点検した。



道路を渡る時は一度止まって右、左、右を観ることを強調

永藤さんは「最初は自分がお子さんに交通安全を教えることに自信はありませんでした。『あやとりい』には指導用のマニュアルがあったので、それを読み込み、お子さんに伝えるべきポイントを理解することから始めました。毎回、お子さんと一緒に自分も学ぼうという気持ちで臨んでいます。今後はお子さんだけでなく、大人向けの交通安全講習にもチャレンジしていきたい」と話す。石川さんは「当店でキッズエンジニアを実施するのは今回が初めてです。お子さんがクルマのパーツや整備用の工具に触れてもらう機会をつくるようにしました。こうした体験を通じて、クルマの点検や整備が安全のために大切であることを理解してもらえるといいと思います」という。4歳と2歳の男子と参加した父親は「交通安全講習はスタッフの方がクイズ形式で進めていた点が良かったと思います。問いかけに一生懸命答えようとする子どもたちの姿が印象的でした。こうしたイベントがあるとお店に子どもを連れて行きやすいので、今後も続けてほしい」と感想を語った。



キッズエンジニアでは子どもたちが自動車整備士の仕事を体験

※あやとりい ひよこ編= 4～5歳児に幼稚園や保育園等の集団教育の中で「音（交通環境音）の理解」「必ず止まること」「必ず観ること」「信号機の理解」という交通安全の基本を繰り返し学ぶことができる交通安全教育プログラム。「あやとりい」は「あなげんを やさしく としあかし りかいて いたたく」の略。詳細は以下のホームページを参照。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/>



Honda Cars 南栃木 羽川店
永藤佳織さん（左）、石川純さん（右）



参加した子どもたちに修了証を手渡す Honda Cars 南栃木 羽川店店長 菊池洋平さん（左）

幼稚園・保育園に出向いて交通安全教室を開催
Honda Cars 鳥取

Honda Cars 鳥取（本社：鳥取県鳥取市）ではスタッフが幼稚園・保育園で、「あやとりい」による交通安全教室を開催している。同社代表取締役社長 小野淳一さんは「Honda Cars には地域に密着して社会貢献をしていくという役割があります。その一環として、地域のお子さんへの交通安全教育を推進していこうと考えたわけです。昨年より当社スタッフと縁がある幼稚園・保育園から始めました。それを2年、3年と積み重ねることによって、私たちの活動が鳥取県内に口コミで広がるでしょう。まずはそこから、幼稚園・保育園での開催依頼をいただけるようになることをめざしていきたい」と話す。

交通安全教室は、音当てクイズと2つのワークシートによる3つのパートで構成されており、同社では1つのパートを1人のスタッフが担当することになっている。「あやとりい」

の指導者養成を統括する本社業務オペレーション室の影井美南子さんは「3つのパートを1人でこなすこともできますが、スタッフ全体のスキルを上げるため、あえて分けることにしました。指導者役が交代していくことで、お子さんも常に新鮮な気持ちで参加できるというメリットもあると思います」と説明する。

2月26日、影井さんを含む女性スタッフ4人が、かいけ心正こども園（同県米子市）を訪問し、園児を対象に交通安全教室を実施



信号が青でも止まって、左右の安全を確かめてから渡るよう指導

した。同園教務主任 門脇知美さんは「4月から小学校に通う年長クラスの園児に交通安全について再確認してもらおうと考えていた時、Honda Cars 鳥取による交通安全教室のを知り、お願いすることにしました。話を聞くだけでなく、参加できるように工夫されていて、小さい子どもたちが楽しめるプログラムだと思います」と、今回の交通安全教室の感想を語った。初めて子どもたちを前に指導したという柘田美里さんは「人前で話すことは苦手に感

じていたのですが、実際にやってみると思った以上にできました。これからも続けていきたい」と今後に向けての意欲をのぞかせた。社長の小野さんは「子どもたちを前に指導するという経験は、スタッフのプレゼンテーション能力やショールームに来店するお子さんへの対応力の向上にもつながるはず。そして、小さなお子さんと関わる仕事をしているということも当社の魅力の1つにしていきたいと考えています」と話す。



かいけ心正こども園での交通安全教室は年長の3つのクラスを順番に訪問する形で行われた



ワークシートを使って道路のどこを歩いたら安全かを説明



写真左から、Honda Cars 鳥取 影井美南子さん（本社業務オペレーション室）、野白綾さん（米子中央店）、田中真由さん（鳥取南店）、柘田美里さん（ハワイ店）



Honda Cars 鳥取代表取締役社長 小野淳一さん

SJ Interview

SJ インタビュー



下校する児童を見送る後藤さん

岐阜県垂井町立垂井小学校 校長
後藤喜朗さん



「いつでも」「どこでも」「誰でも」実践できる 交通安全指導をめざすための提言

昨年、(公財)交通事故総合分析センターは設立 25 周年を記念して広く一般から懸賞論文を募集した。そして見事、最優秀賞に輝いたのが、後藤さんによる「世界一安全な道路交通社会の実現に向けた学校教育における取組」という論文である。

中学校の英語科教員であった後藤さんは岐阜県教育委員会での勤務を経て、昨年 4 月に垂井小学校に校長として赴任した。その直後に実施された交通安全の行事を見たことが、今回の論文を書くきっかけになったそうだ。「この行事には児童と教員だけでなく警察、地域の方々も参加して、地域ぐるみで児童の命を守るという姿勢を感じました。こうした交通安全指導を『いつでも』『どこでも』『誰でも』実践できるようにすることが、世界一安全な道路交通社会の実現につながるのではないかと考えたのです。最初は、学校での交通安全指導に対する私自身の願いをまとめるつもりで書き始めました。教員の立場からみたら、どれも当たり前で普通のことだと思います。ですから、最優秀賞になったと聞いた時は驚きました」と後藤さんは振り返る。

連携の仕組みを構築することで より系統的で充実した指導ができる

今回の論文の中で、後藤さんは同じ校区にある幼稚園・保育園、小学校、中学校(校種)が連携した交通安全指導の仕組みづくりを次のように提案している(右記参照)。

校種間の連携のポイントは、「幼児、児童、生徒間の交流」「教職員相互の交流」「指導計画の交流」「学習内容の交流」「教材の交流」といえる。

「垂井町では、私が赴任する以前から幼稚園・保育園と小学校とが日常的に交流しています。例えば、小学校の教員が幼稚園に出向いて授業をしたり、園児が小学校に来て、小学生のお兄さんやお姉さんと遊んだりしています。また、小学校の外国語活動と中学校の英語科で教員間の交流が積極的に行わ

れていますし、小学校と中学校を兼務している教員も増加傾向にあります。現行の取り組みをアレンジすることで、幼稚園・保育園、小学校、中学校の連携は可能だと考えています。連携の仕組みを構築すれば、より系統的な交通安全指導を実施することが可能になり、その内容も深めていくことができます」。

教員自身が交通安全への 理解を深めることが必要

各学校には独自の教育目標があるので、交通安全指導を実践する上でも教育目標と関連づけることが重要だと後藤さんは話す。「当校の教育目標は『心の豊かな子 やさしい子 かんがえる子 げんきな子』であり、『笑顔』と『感動』のあふれる『魅力』といった学校をキーワードとして掲げています。当校の場合は交通ルールやマナーを守って、安全に登下校することが児童本人や家族、学校の先生、地域の方々の『笑顔』を生み出すということを理解してもらう指導となります。そして、こうした指導の継続が『心の豊かな子』につながると考えています」。

さらに、学校で交通安全指導を実践するにあたっては、教員自身がその知識を身につけ、理解を深めることも大切である。そのため、校内研修の中に交通安全指導に係る内容を位置づけておくべきだと後藤さんはいふ。垂井小学校が毎年、全校児童を対象に実施している交通安全教室では同校の先生方が主体となり、道路の歩き方や自転車の乗り方の実技指導をしている。同校は交通安全教室の運営や指導に関する教育計画を作成し、交通安全担当の教員が異動しても、後任がスムーズに引き継げるようにしているのである。また、同じ通学路を利用する 1 年生から 6 年生までの班を編成し、班ごとで登下校している。下校時は各班に教員が付き添い、随時、交通安全指導ができるようにしている。「私自身もできるだけ校区内を歩くことを意識しています。クルマで通った時には気づかない通学路の危険箇所を歩くことで実感する

ことから、子どもに伝えるべきことがわかってきます」。

交通安全指導を核とした 魅力ある学校づくりに向けて

垂井小学校の児童は、子ども見守り隊や登下校のボランティアなど多くの人々に見守られている。同校ではこのような地域の方々に感謝をする会を開き、交通安全指導について、ともに学び合う機会として位置づけている。後藤さんは地域の方々から児童の良い行動を見かけたら、小学校に連絡してもらいたいと思っている。「信号機のない横断歩道を渡ろうとする子どもが歩行者保護のために停止したクルマのドライバーに、帽子をとって頭を下げて挨拶していたということも地域の方から教えていただきました。この時は校内放送で子どもたちにも知らせ、挨拶

したという行為によって、ドライバーの方へ感謝の気持ちを伝えることができたという意味づけもしました」。

このように、交通安全指導を核とした魅力ある学校づくりに後藤さんは日々取り組んでいる。「子どもの命を守り抜くことが、私たちにとって最大のミッション。交通安全指導においても、決して妥協することがあってはならないのです」。

Honda でも、幼稚園・保育園、小学校、中学校と各年代別に教材プログラムを作成し、普及を行っているが、校種間の連携という広い年代としてのとらえ方はなかったため、このような考え方は今後の年代別教材開発のヒントになると考えている。

※後藤さんの論文をはじめ、(公財)交通事故総合分析センター設立 25 周年記念懸賞論文は以下のホームページで閲覧が可能。
http://www.itarda.or.jp/ws/essay/h29_keisai.pdf

●校種間の連携による交通安全指導

①交通安全指導に係るカリキュラムの交流

校種間で交通安全指導に係るカリキュラムを共有することで、互いの学習内容を確認することができる。特に、どの学年でどんな交通安全指導を実践するのかを交流することで、既習事項を見直したり、学習内容の重なりがないように確認したりする絶好の機会となる。一方で繰り返し学習内容を指導することでより徹底を図ることもできる。

②保護者参観を活用した交通安全指導に係る授業公開

校種間での日常的な交流をめざし、保護者参観等の機会に交通安全指導に係る授業交流を行い、幼稚園・保育園、小学校、中学校の教員が見合うようにする。保護者の方にも交通安全指導に係る学校の取組を知っていただく機会となり、家庭や地域でも同じ構えで交通マナーや交通ルールを指導していただくこともできる。

③教職員相互の出前授業の実施

小学校の教員が幼稚園・保育園で、幼稚園・保育園の教員が小学校で、小学校の教員が中学校で、中学校の教員が小学校で出前授業を行う。

④校種間を超えた合同授業の実施

幼稚園児・保育園児と小学生、小学生と中学生が共に楽しみながら交通安全について学ぶ合同授業を位置付ける。例えば、交通安全に係るクイズや標識当てクイズを中学生が小学生に出題するという方法がある。また、小学生が幼稚園・保育園児に対して交通マナーや交通ルールに係る寸劇を行ったり、人形劇を行ったりすることもできる。

⑤校種間の合同の研修会の開催

夏季休業などの長期休暇を活用し、幼稚園・保育園、小学校、中学校の教職員対象の交通安全指導に係る合同研修会を位置づける。講師には、警察や交通安全協会の方、地域の登下校の見守り隊の方に依頼する。校種を超えて合同で研修会を開催することで交通安全指導に係る願いを共有することができる。

TRAFFIC SCOPE

交通参加者の行動を観察する

「TRAFFIC SCOPE」は交通参加者の行動観察を通じて、ドライバーやライダー、自転車利用者、歩行者に守るべきルールがあることを再認識してもらうための連載記事です。

安全運転を阻害する運転中の「ながらスマホ」は絶対にしてはいけない！

DATA 基礎情報

「ながらスマホ」に起因する交通事故が増えている

警察庁の調べによれば、平成 28 年中の携帯電話使用等に係る交通事故は 1,999 件発生しており、5 年前（平成 23 年）の約 1.6 倍に増えている（グラフ参照）。特に、スマートフォン（以下、スマホ）等の画面を見たり操作して起きた画像目的使用の事故は約 2.3 倍となっている。

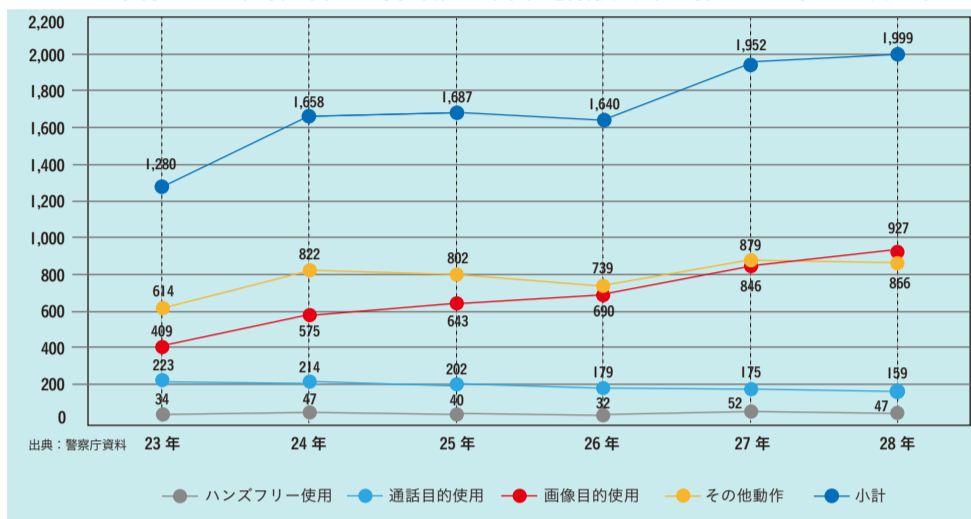
平成 28 年には愛知県でスマホを操作しながら

ら運転していたトラックに横断歩道を渡っていた小学生がはねられ、死亡するという痛ましい事故が起きた。また、平成 29 年には名神高速道路でスマホを見ながら運転していたトラックが渋滞で停止中の軽自動車に追突し、軽自動車に乗車していた高齢夫婦が亡くなるという事故も発生している。このように運転中、スマホを注視・操作する、いわゆる「ながらスマホ」に起因する交通事故が増加傾向にあり、重大事故にもつながっている。



スマホで通話しながら運転しているドライバー

●原付以上運転者（第 1 当事者）の携帯電話使用等に係る交通事故の発生状況



WATCHING 観察

信号待ちでスマホを手にとり、注視・操作するドライバー

実際に、東京都内の幹線道路でドライバー・ライダー・自転車利用者の運転中（信号待ちの停止中含む）のスマホの使用状況を観察した。2時間の観察の結果、ドライバーは65人、ライダー3人、自転車利用者6人がスマホを使用していた（右表

参照）。使用状況で多かったのは、信号待ちでの画面の注視である。これはスマホを地図として使い、目的地までのルートを確認するためではないかと思われる。中にはスマホではなく、ノートパソコンを見ながら運転している人もいた。信号待ちで操作を始めるドライバーは、前車が発進してから遅れて追従し、クルマが動き出したから慌てて操作を終了するケースが目立った。



信号待ちでスマホを操作するドライバー

ADVICE アドバイス

便利なスマホだが、運転中は使用しない

運転中にスマホを使用する人は「ほんの一瞬だから大丈夫」と安易な考えを持っているのではないだろうか。一瞬といえどもスマホの画面に意識が集中することで、前方に停止しているクルマや道路を横断する歩行者がいた場合に発見が遅れ、それが事故につながることもある。「ながらスマホ」は、思っている以上に危険な行為であることを再認識してほしい。今回観察した明治通りは片側2車線の幹線道路だが、神宮前交差点付近では

横断歩道以外の場所を渡る歩行者も散見された。見通しの良い幹線道路でも歩行者の横断があるかもしれない。「ながらスマホ」によって、こうした歩行者の発見が遅れることも考えられる。また、ハンズフリー使用による通話も視線は前方に向けられているが、意識の脇見となることがあるので注意が必要といえる。スマホは私たちの生活や仕事に欠かすことのできないとても便利なツールだ。しかし、運転中のスマホ使用は道路交通法違反となるだけでなく、脇見運転の要因となり、たいへん危険である。ドライバー・ライダー・自転車利用者は運転する時、スマホを使用することなく、運転そのものに集中できる環境を自らつくり出してほしい。

●観察結果

	スマホ・携帯電話使用			スマホ・携帯電話未使用	総数
	注視	操作	通話		
ドライバー	29(7)	27(6)	9(4)	528	593
	65(17)				
ライダー	1(0)	2(0)	0(0)	28	31
	3(0)				
自転車利用者	3(0)	1(1)	2(1)	59	65
	6(2)				
合計	74(19)			615	689

※()内は走行中に使用。ドライバーはタクシー・バス除く。

観察場所／東京都渋谷区 明治通り 神宮前交差点付近
 観察日／3月26日(月)
 観察時間／15:00～17:00
 天候／晴れ



信号待ちでスマホを操作するライダー



携帯電話で通話しながら走行する自転車利用者



スマホを操作しながら車道を歩く歩行者もいた



横断歩道以外の場所を渡る歩行者も少なくなかった

KYT

危険予測トレーニング 第62回 上りカーブを通過しようとする時（四輪車編）

あなたは上りカーブを通過しようとしています。
安全に走行するには、どのようなことを予測する必要がありますか？



交通事故を防止するためには、路上で出会うさまざまな危険を予測することが大切です。このコーナーでは危険感受性を高めるための題材を提供します。今回は四輪車のドライバーに、上りカーブを通過しようとする時の危険について考えてもらうためのKYTです。

活用方法

1. 少人数のグループをつくります。
2. 「交通場面のイラスト」を見せながら、意見を出し合います。
3. その後、「解答・解説※」を参考にして、どんなことに気をつけて運転すれば良いか再び話し合ってください。

※「解答・解説」と「交通場面のイラスト（カラー・A4版）」は下記SJホームページでご覧いただけます。またPDFファイルもダウンロード（無料）できます。

【使用上の注意】

- 営利目的での利用はおやめください。
- 内容の無断転載、無断改変、一部抜粋しての利用はおやめください。
- その他、使用に関するご質問はお問い合わせください。

本田技研工業（株）安全運転普及本部

TEL：03（5412）1736 E-mail:sj-mail@spirit.honda.co.jp

© 本田技研工業（株）

? SJ クイズ 四輪車編

Q1

年齢層別で、アクセルとブレーキの踏み間違い事故の全交通事故に占める割合が、最も高い層は次のうちどれでしょう？（平成24～28年の合計）

- ① 24歳以下 ② 65～74歳 ③ 75歳以上

Q2

平成28年の75歳以上の高齢者ドライバーが第1当事者※となった交通死亡事故件数を車種別にみると、平成19年と比較して約2.3倍増加した車種は次のうちどれでしょう？

- ① 軽乗用車 ② 軽貨物車 ③ 普通乗用車

Q3

75歳以上の高齢者ドライバーが第1当事者※となった交通死亡事故件数を車種別・事故類型別にみると、軽乗用車で最も多い事故類型は次のうちどれでしょう？

- ① 出会い頭衝突 ② 正面衝突 ③ 工作物衝突

※第1当事者＝交通事故の当事者のうち過失が最も重い者、又は過失が同程度の場合は被害が最も軽い者。



「解答」は7面下、「解説」は下記SJホームページでご覧いただけます。
<http://www.honda.co.jp/safetyinfo/sj/>

Honda 春のセーフティキャンペーン実施中！ 声かけでワンポイントアドバイス

Hondaでは4月1日～5月31日の期間、「2018年Honda春のセーフティキャンペーン」を実施しています。期間中は、Honda及びHonda関連企業などHondaグループ全体で活動し、無事故・無違反の継続活動の実施、自ら率先した交通安全を実践。二輪・四輪販売会社では、お客様に安全運転を意識していただくため、全席シートベルトの着用やバイクツーリングに向けたアドバイスのお声かけをはじめ、冊子の配布や映像の放映など啓発ツールを多数用意しています。

また、ホームページからはHondaの最新の安全技術の情報、安全運転のためのアドバイスを紹介した冊子「Think Safety」や、家庭で交通安全について子どもと一緒に考えるきっかけとするための「きけんよそくトレーニングぬりえ」などがダウンロードできます。



四輪販売会社で配布している安全情報誌「Think Safety」。以下のホームページからダウンロードすることも可能。
http://www.honda.co.jp/safetyinfo/topics/safety_campaign/

●KYTぬりえダウンロード（PDF）

ダウンロードした「きけんよそくトレーニングぬりえ」に色をぬったら、下記宛にお送りください。ぬりえは3種類あり、1枚から応募できます。ぬりえ1枚につき、ASIMOの交通安全ステッカー1枚をプレゼント！

【応募締切】

2018年6月10日（日）

【送付先】

本田技研工業株式会社 安全運転普及本部
交通安全ぬりえキャンペーン事務局 行
〒107-8556 東京都港区南青山2-1-1



※送付いただいたぬりえは、交通安全ステッカーと一緒にご返送いたします。
※お申込みいただきましたお客様の個人情報は、発送業務以外の利用は致しません。